



1

突然、僕をねっとりしたまなざしで見つめ、次の瞬間、姉は僕を抱きすくめた。

「お……おね、おねえ……お姉ちゃん？ あのあのあのっ……ぎゃっ!!」

なんなのだろう、この感触とこの感覚は。僕の首筋にぐさりと刺さったものはなに？ 悲鳴は上げたものの、陶然としてしまいそうな感覚にも包まれて、足元が崩れていきそうだ。思わずがりつくと、姉は甘い甘い声で囁いた。

「これで國ちゃんも私たちの仲間よ」

「仲間？」

気が遠くなっていく。膝がくたくたと折れて、僕は畳にへたり込んだ。

見上げると、姉がなまめかしささえある表情で僕を見ている。怖い。とてつもなく怖い。ものごころついたころから、僕は姉が怖かったのだが、今夜の怖さは尋常ならぬものだ。それでいて、姉はとてつもなく美しく見えた。

三つ年上の姉の美江子は、昔から怖かった。中学生くらいになったころからは、美人にもなった。僕にとっては美人の自慢の姉でもあり、怒ってなんかいなくても怖い、物語に出てくる寮の舎監先生のような、そんな存在だった。

頭もいい姉に、テスト前となると僕は勉強を教わった。姉はプラスチックのものさしを手に、本物の先生みたいに教えてくれた。ものさしは教科書の重要ポイントを示すために使われていたのだが、そんなものを目の前にちらつかせられたら怖い。

「指で示したらよくない？」

「だって、ものさしって武器にもなるじゃない」

「弟に勉強を教えるのに、武器なんかいらないでしょ？」

「いるかもしれないから」

「なにをするつもり？」

「なんにもしないよ」

両親だって友達だって近所の人々だって、先生だって親戚の人々だって、姉の友達たちだって、僕には言った。

「優しくて美人のお姉さんがいて、國友くんは幸せね」

幸せではある。美人というのもまちがってはいないし、優しくもある。姉は僕を怒鳴りつけたり、殴ったりはしない。三つちがいの姉と弟だと、小さいころにはつかみ合って喧嘩をしたりするものだそうだが、姉とはそんな喧嘩もしなかった。

いつだって優しく穏やかに、時には勉強を教えてくれ、時には注意もアドバイスもしてくれ、相談にも乗ってくれる姉なのに、なぜか僕はずっと姉が怖かった。

大学に進学したら東京に行くと姉は言っていて、その望みをかなえた。僕も東京に行きたくて

、東京の大学を受験したら合格した。両親は姉の東京行きも僕の東京行きも快く許してくれたのだが、父に言われたのだった。

「お姉ちゃんが借りてる部屋はけっこう広いから、國ちゃんも一緒に暮らせるだろ。お姉ちゃんも来てもいいと言ってきてるよ」

「お姉ちゃんと暮らすの？ だけどさ、お姉ちゃんは女で、僕は男なんだけど……」

「そんなのはお父さんは知ってるよ。だからったって姉弟だろ。どうってこともないない。それとも、なにか、國ちゃん？ おまえは姉の美江子を……」

「殺されてもあり得ませんっ!!」

「当たり前だ。聞いたお父さんが馬鹿だった。ごめんな。じゃあ、決定。仲良く暮らせよ」

軽くいなされて決められてしまい、僕は父の決定に従うしかなかったのだ。

姉が近くにいない三年間は、寂しさもあったけれど平和だった。高校の三年間は僕はひとりっ子になって、ひとりでがんばって受験勉強もした。大学は姉とは別々の学校だが、一緒に暮らすのか。怖い、とどうしても思ってしまう。

どうして僕はそんなにお姉ちゃんが怖いんだろう？ 暴力をふるうわけでもなく、暴君ってわけでもない姉なのに、物理的ではなく精神的怖さか。そっちにしたって、外見も穏やかな普通の女性なのに。

背は僕よりも姉のほうが少々高い。姉よりも背の低い弟は珍しいのかもしれないが、そう育ったのだから仕方ない。僕が標準以下の身長なのであって、姉は女性としては中背で、身体つきもたくましくもない。力も並みの女性だろう。

十八歳の僕は成長期が終わってはいないだろうから、背が伸びたら姉を追い越せる希望もある。僕は非力だけれど、万が一姉と取っ組み合いになったとしても、負けはしないだろうと希望的観測を抱いてもいる。

大学生活にもなじんできた僕。大学四年生で、就職も決まりそうだとやっている姉。ごく平凡な姉弟の日常だ。なのになのに、姉とふたりで暮らし、家事も分担して和やかにやっついてさえも、僕は姉が怖かった。

今夜はじめて、姉の怖さのわけがちょっぴりわかったのだが、その詳細がわからない。姉って何者？ 化け物？ 嘘だよーっ!! と叫びたくなった。

「お姉ちゃん、僕になにをしたの？」

畳にへたったままで、首筋にそっと手をやった。小さな小さな虫刺されの跡みたいな感じが手に触れた。

「僕がお姉ちゃんの仲間って、どういうこと？」

「國ちゃんが来るのを待ってたんだ。東京に来た早々ってのも、学校にも東京にも慣れてないだろうに、かわいそうだから今まで待ってたの。待ちくたびれたよ。早く國ちゃんの血が吸いたくて」

「血?!」

「そうよ。私、國ちゃんの血を吸ったの」

「お姉ちゃんって……」

吸血鬼？ ヴァンパイア？ 僕の頭の中に、吸血鬼に関する乏しい知識が攻め寄せてきた。

「弟の血なんて血縁が濃すぎて、よくないんじゃない？」

「血族結婚じゃないんだから、血が濃いってのは関係ないよ」

「お姉ちゃん、昼間だって活動してるじゃないか」

太陽とにんにくと十字架が弱点で、斃すには銀の弾丸。とどめを刺すには十字架型のくさびを心臓に打ち込む。吸血鬼ドラキュラのモデルはワラキア大公ヴラド・ツェペシュ。僕のそんな知識を口にしてみたが、姉はしゃらっと応じた。

「そんなの俗説だよ。私は人間としてだって普通に活動できるの」

「お姉ちゃんはどうやって吸血鬼になったの？ 誰かに血を吸われたの？」

「吸血姫って呼んで。吸血お姫さまだよ」

鬼も姫も音は「き」だ。そんなのはどうでもいいじゃないか、と言いたかったのだが、鬼気迫る妖艶な吸血姫の美しさを目の当たりにしていると、信じないとも言えなくなってしまった。

「彼よ」

証拠なんか見せてくれなくても、僕は完全に信じていたのだが、重ねて信じるしかなくなる事態が起きた。窓から蝙蝠が飛び込んできて、そいつが人間の男の姿になったのだ。

黒づくめの忍者ふうルックの、背の高い男。吸血王子なのか。姉とは美男美女の好一对としか言いようのない、美しく、それでいてまがまがしさもたたえた容貌をしている。彼は僕に腰を折って典雅な礼をしてから、口を開いた。低い美声だった。

「美江子とつきあうようになって、血ももらったんだ。彼女の同意も得たよ。きみは美江子の弟なんだね。俺たちの仲間にもなったんだろ？」

「ついさっき、仲間にした。翔、今夜も素敵」

「おまえも綺麗だよ、美江子」

弟の前で見せつけるな、とも言いたかったのだが、僕はぽーっとふたりに見とれてしまっていた。

翔と呼ばれた男が姉を抱き寄せ、くちびるを触れ合わせる。背の高い屈強そうな身体つきの男に抱きしめられていると、姉があえかにか細い姫君に見える。姉とのキスを終わると、姉を抱きしめたままで翔は言った。

「最初は首筋から血を吸うんだけど、吸血鬼の恋人同士のキスは、血の味がするんだよ」

「國ちゃんの首筋から吸った新鮮な若い血もおいしかったけど、翔とのキスの血の味はまたちがってて最高」

「俺たちがもっとも満足できるのは、愛し合うパートナーとのキスの血だよ。教えてやっただろ、美江子？」

「体験もしてみて、本当だってよくわかったわ」

「だからさ、國友」

なれなれしく僕を呼び捨てにして、翔は言った。

「俺は美江子を俺の恋人にした。美江子にも俺がいる。けれど、吸血鬼の仲間ってのはマイノリティなんだよ」

「そりゃあそうでしょうね。そんなものがうようよいたら……げげげのげ」

「おまえも吸血鬼になったんだから、血がほしい、と囁いたらうなずいてくれる、美しい女を捜せ。無理やりやっちはいけないんだ。互いに恋をして、愛し愛される男と女。それがベストカップルなんだから、おまえもおまえが愛せて、おまえを愛してくれる女を見つけろ」

「男でもいいんだけどね」

「美江子、こいつ、そっちの趣味か？」

「どうだろ？ 國ちゃんの彼女って、一度も会ったことはないな。中学まではいなかったよね」

「中学生だったらいなくても当然かもしれないけど」

ふたりそろって僕を凝視し、姉が尋ねた。

「高校生になったら彼女はいたの？」

「いないよ」

「あいかわらずもてなかったんだね。かわいそうに」

「もてなくはないけど……」

いいや、もてない。悔しいけれど認めるしかないけれど、女の子にもてないからって、男の恋人を求める趣味もない。翔のような妖しい美青年ではなく、姉のような妖しくもおっかない美女ではなく、清楚な可愛い女の子の恋人だったらほしい。

けれど、もてない僕にそんな恋人が見つかるのだろうか。まして、僕はその子を吸血鬼にしないといけない？ 拒否権すら与えられずに僕は姉に吸血鬼にされてしまったのだが、姉弟はそれでもいいのだろうか。

恋人を見つけ、彼女にお願いして血を吸わせてもらい、彼女に仲間になってもらう。そうすることで恋人たちの仲が深まる。人間にはなし得ない、深く濃く果てしなく睦まじいカップルになれる。でも、僕だったら最初の段階でつまづくのではないだろうか。無理だよ、と言いたくなっている僕に、翔が言った。

「今も彼女はいないんだな？ そうだろうな。いないよな、おまえじゃ。美江子の弟だってのに、ちっちゃくて頼りなさげでひ弱そうで、おまえたち、本当に血がつながってるのか？」

「実の姉弟だよな、お姉ちゃん？」

「そうのはずだけど、事実確認はしてないから、確信は持てないな」

「そんなあ……お姉ちゃんったらひどいよおっ」

「國友、黙れ」

一喝されて口を閉ざすと、翔は言った。

「俺だって、美江子を見つけるには時間を要したんだ。長く長く捜し求めて、ようやく理想の女とめぐり会えた。おまえは理想のなんのと贅沢を言ってる場合じゃないぞ。さっさと女を見つけないと、飢えに苦しめられるんだ」

「どうしようもなくなったら、私の血をあげるけどね」

「美江子、弟を甘やかすな」

「だって、かわいそうじゃないの。國ちゃんだったら彼女ってのもなかなか……がんばってね、國ちゃん。お姉ちゃんも可愛い女の子を探してあげる。でもでも、紹介してみたって、國ちゃんじゃ……こんなのいやって……ううん、國ちゃんは可愛いもんね、きっと彼女はできるよ」

半分は悪口だったようにも聞こえたが、励ましてもくれたのだろう。姉の言葉に、僕は力なく

うなずくことしかできなかった。

ああなってこうなって姉が翔に吸血鬼にされたのだとしたら、翔は誰にされたのだろうか？ 前の彼女に？ しかし、姉以上に怖い翔には質問できない。姉にも質問できない。姉は知っているのかもしれないが、言いたくないのかもしれないのだから。

現代の吸血鬼は互いの血によって結びつき、カップルの絆を深めていく存在であるらしい。僕も吸血鬼の深い部分は知らないのだが、昔の吸血鬼のようなものではない。姉が僕の血を吸ったのは、時には新鮮な別の人間の血がほしかった、というのもあるようだが、もうひとつ、大きな理由があったのだった。

「人間なんかとは桁違いの官能が得られるのよ。國ちゃんにもあの素晴らしい官能を味あわせてあげたかったの」

「官能……」

「國ちゃんだって、愛し合える女と愛し合って血を与え合えば、心と身体で体感できるのよ。論より証拠っていうでしょ。早く彼女を見つけなさい」

そんなこと言われたって、僕には彼女なんて容易にはできないよ。弱音を吐きたくなくなった通りに、僕には彼女なんてできなかった。

それはそれとしても、吸血鬼ではなかった姉が僕にはあんなに怖かったわけはどこにあったのだろうか。姉は東京に来て翔と知り合い、告白されてつきあうようになって、彼に血を吸われて吸血鬼になったのだそうだから、故郷にいたころは普通の高校生だったのだ。

なのに、あんなに僕を怯えさせた姉は、昔から化け物の素質があったのだろうか。だとしたら、僕には素質なんかないのだから、吸血鬼にしないでほしかった。

なりたくなかったと嘆いてみても、僕は吸血鬼になってしまったのだ。翔に吸血鬼にされた姉によって、僕も吸血鬼になり、血を欲する体質になった。人間の食べものも食べられるので、常に飢餓にさらされているのではないが、時として猛烈に血がほしくなる。そうになると、姉が指先をしゃぶらせてくれるのだった。

「首筋は特別だから、國ちゃんには吸わせられない。キスは恋人たちの行為だから、これで我慢してね」

姉の指をしゃぶるってとっても変な感じだけど、かすかに喉に流れ込んでくる血は、極上のワインもかくやと思われるほどに美味だ。血はぽっちり吸えば飢えが満たされる。けども、姉の血がこんなにもおいしいのだから、愛する女性の血はさぞや、とってしまう。

それでもそれでも、僕には彼女なんてできない。可愛いな、好きだな、と感じた女の子はいて、思い切って告白したのだが、あっけなくふられた。

今夜は姉は決まっている就職先で面接があるらしく、留守にしている。吸血鬼だって就職しないと、人間としての生活が成り立たないのだ。翔にしても映画会社で働くクリエイターなのだそうです、表面はまっとうな社会人だ。

「そうだろうとは思ってたけど、だらしねえな」

その翔が姉のいない部屋にやってきて、ふられちゃったよ、と話す僕を見て吐息をついた。

「僕は翔さんみたくかっこよくないもん」

「まあ、たしかに」

「僕はもてないんだもん。お姉ちゃん、早く帰ってこないかな。おなかがすいたよ」

空腹ではなく、血を欲する飢えだ。翔には理解できているのだから、うなずいて言った。

「俺がやるよ」

「翔さんの指をしゃぶるの？ え？ え？」

ぐいっと抱き寄せられて、くちびるを奪われた。姉の指先の血以上に、くちびるごしに流れ込む生の血の味は素晴らしかった。

「美江子の弟なんだもん。愛し合っていない男と男のキスでも、美味だっただろ？ 俺もうまかったよ。こんなものではない味と官能を互いに与えられるのが、吸血鬼の恋人たちのキスだよ。おまえも経験したいだろ。さっさと彼女を見つけろ」

ぼわんとしてしまっている僕に、翔が光る目をして言った。彼女とのキス……もちろんそれも経験したいけど、あなたとのキスももう一度……言えるはずもないから我慢したけれど、本当はそう言いたかった。

彼女なんてできっこないよお。でも、愛するひとの血がほしいよお。どうすりゃいいんだろ。なんて考えている僕のもとに、耳寄り情報がやってきた。

僕の通っている大学に「ヴァンパイア研究会」というサークルがあるという。ヴァンパイアに興味のある学生が集っているはずだ。そういうサークルにだったら、僕が求める女性がいるのではないかと期待して部屋を訪ねると、三人の女性が出迎えてくれた。

「私は三年生で、サークルのキャプテンなの。このふたりは私の妹。三年生の私はアイ、二年生がマイ、一年生はミィ」

アイ、マイ、ミィって、英語のなんとか活用みたい。しかし、三人とも相当な美人だ。背丈は三人ともに僕と同じくらい。どれにしようかな、と僕が勝手に迷っていると、アイさんが言った。

「去年までは他の部員もいたんだけど、今年は私たち姉妹だけになっちゃったのよ。國ちゃんって呼んでいいでしょ？ 國ちゃんも含めて四人しかいないサークルだけど、少人数だとそれはそれで楽しくやれるよね。これからよろしく」

「はい。よろしくお願いします」

それからは四人で、吸血鬼に関する研究活動をした。映画や物語に於けるヴァンパイア像の研究がメインで、目新しいものではない。古典の吸血鬼ってのは意外にステロタイプなのだが、現代作家の創造した新しい吸血鬼もいる。吸血鬼以外にも古今東西の妖怪や妖精のたぐいの研究もした。

吸血鬼はおおむね美しい。翔も美青年だし、姉も美女だ。翔のもとからの仲間の吸血鬼ってのもいるらしいが、その方々には僕は会わせてもらっていない。僕に恋人ができたなら、カップルで吸血鬼の集いに参加させてもらえるのだそうだ。

新種の吸血鬼である、というか、そもそも想像の産物である吸血鬼に、本物の旧種がいるのかどうかは知らないが、新種の方々もさぞや美しいのだろう。怖いという気持ちは常につきまとっているが、僕も早く女の子とカップルになって、吸血鬼の会合に出席したかった。

美しいといえば、サークルの女性たちも美しい。彼女たちもなんだか怖いような気がするのは、ヴァンパイアサークルに所属しているという先入観のせいだろう。三人ともと仲良くなるにつれて、告白したいという気持ちが高まっていった。

お姉さんたちもいいけれど、やはり同い年のミィちゃんがいい。ある日意を決して、僕はミィちゃんに告白した。

「嬉しい。私も國ちゃんが好き。そう言ってくれるのを待ってたのよ」

「へっ？ ほんと？」

「本当だよ」

むしろ僕は驚いた。こんなに可愛い女の子が、僕みたいなちびに告白されて嬉しい？ 変だな、とは思ったのだが、僕だって嬉しいのだから、疑ってはいけない。ミィちゃんは男の身長やル

ックスなんか気にしない、心の広い女の子なのだ。

「お姉ちゃんたちも喜んでくれるわ。お姉ちゃんたちの前でもう一度言って」

「部室で？」

「私たちのマンションに来てよ」

部室ではなく喫茶店で告白した僕は、ミィちゃんの頼みにうなずいた。

アイ、マイ、ミィ三姉妹は、美江子、國友の姉弟同様、地方から上京してきてきょうだいで暮らしている。僕には姉がいるのだから女性に免疫がないわけではないが、姉以外の女性には慣れていない。どきどきしながらミィちゃんたちの部屋に連れられていくと、姉さんたちが待っていた。

「いらっしゃい。國ちゃん。ミィとそうなったのね。私も嬉しい」

長姉が言い、次姉も言った。

「待ってたんだ、國ちゃん。早速で悪いんだけどね……姉さん、ミィ、いい？」

いいよ、とあとのふたりがうなずく。え？ な、な、な、なに？ 思わず、二、三步下がった僕を、三姉妹がじーっのじーっ凝視する。この目は……この目は……いったい？ 僕はあとずさりした姿勢で固まった。

比喩ではなく、文字通り固まったのだ。動けなくなって、僕は六つの瞳に見つめられ、頭の中を真っ白にしていた。

意識が戻ると、僕はベッドに横たえられていた。手で身体を探ると、上半身裸。固まってしまった僕は、三姉妹にベッドに運ばれてシャツを脱がされたのか？ なんのために？ 上体を起こそうとすると、アイさんの声に阻止された。

「そのままいて」

「國ちゃん、好きよ」

マイさんも言い、僕の胸に顔を近づけてくる。アイさんもミィちゃんも、三人そろって僕の胸に顔を伏せた。

「……あのっ、あのっ、なんなのでしょうか。これは？」

いったい僕はなにをされているんだ？ 彼女たちも吸血鬼？ 血を吸われているのではないよなのだが、ただ、キスされているのだろうか。三人の女性に裸の胸にキスされている？ そう考えると気絶してしまいそうになる。顔がかーっと熱くなるのを感じて、動けずにいる僕の耳に、ミィちゃんの声が聞こえた。

「こうなったら正直に言うね。私たち、メドゥーサ姉妹なの」

「メドゥーサ？」

ギリシャ神話に出てくる化け物だ。見たものを石に変える能力を持つ魔物。頭髮は無数の毒蛇で、イノシシの歯、青銅の手、黄金の翼をそなえた容姿をもっている。メドゥーサも三姉妹だったはず。

こっちの三姉妹はそのような容姿はしていないが、実体を隠しているだけなのか。髪が蛇だなんてこともなく、僕は彼女たちの目によって固まらされたのだが、気を失っていた間は、石にされていたのだろうか。

「國ちゃんは化け物にも詳しいよね。メドゥーサって知ってるでしょ」

「う、うん、だいたいはね。ミィちゃん……それって……」

「私たちは見た目は普通の女の子だよ。蛇の髪だとか黄金の翼だとかはないんだけど、人間を一時的に石にする能力はあるの。身体を石にするというよりも、精神的に石化するっていうのかな」

「それとね」

アイさんも言った。

「こうやって若い男の子の胸に口づけて、魂の中からエネルギーをもらうの。國ちゃんは私たちに好意を持ってくれてるでしょ？ ミィに告白までしてくれたんだもの。レイプみたいに無理やりっていうのはしたくないから、國ちゃんが言ってくれるのを待ってたの。嬉しいな」

「は……はあ……」

マイさんも言った。

「こうして國ちゃんの胸にくちびるをつけると、國ちゃんが考えてることもちょっぴり読める。國ちゃんったら、ヴァンパイアなんだね。一種、同類じゃないの」

知られてしまったのか。ならば話は早い。僕のエネルギーはあげるから、あなたたちの血をちょうだい。ミィちゃんの血だけでもいいからちょうだい。僕が一心に念じていると、その想いを読み取ったようで、ミィちゃんが言った。

「國ちゃんのエネルギーをもらったからといっても、國ちゃんが衰えていくってことはないんだよ。長年の間にはあるかもしれないけど、じきにどうこうなったりはしないから安心して。でも、どうなんだろう、マイちゃん？ 私たち、ヴァンパイアになれる？」

「別種の妖怪にはなれないんじゃない？ ねえ、姉さん？」

「吸血鬼になんかなったことはないからわからないけど、下等な妖怪だよ。私はいやだな」

「ミィ、あんたがなれば？ 國ちゃんの要求と私たちの要求が一部分で一致するんだから、ミィはやだ、ってのは通らないと思うよ」

「そうそう。ミィ、國ちゃんに血を吸わせてあげなよ」

姉さんたちが妹に言い聞かせてくれて、ミィちゃんはいやそうにうなずいた。

「ものはためしに吸ってみたら？」

「はい、では、やってみます」

ベッドに起き上がると、ミィちゃんが首筋を近づけてきた。細かく説明しなくていいのは助かるのだが、姉さんたちに注視されていてはやりづらい。僕のそんな気持ちをも読み取ったのか、アイさんとマイさんは出ていってくれ、僕はミィちゃんの肩を抱いて、首筋に噛みつこうとした。

「うっ!!!」

が、堅くて牙が立たない。平素は隠れている牙が血を吸うときにはあらわれてくるのだが、ミィちゃんの首にぐさっと刺さらない。手で触れる分にはやわらかい肌が、僕の牙を拒絶するのだ。

「無理みたいね。別種族の魔物だからなんだろうな」

「血……吸えないのか」

「いいじゃない。國ちゃんは吸血鬼なんてやめて、私たちの仲間になればいいのよ」

「吸血鬼ってやめられるの？ やめられるとしても、僕がメドゥーサになれるの？」

「メドゥーサって女だから、國ちゃんにはなれないよ。仲間になるの」

それだと仲間というよりも、生贄なのではないのだろうか。そんなのそんなのそんなの、とうつむいていじけていると、ミィちゃんは僕に指を差し出した。

「こっちだったら吸えるんじゃない？」

「ありがとう。でも……これだと本来の愛の交歓にはならないんだよね」

「しようがないのかもね。國ちゃん、だからって普通の人間の女の子と浮気なんかしたら駄目だよ。もしも浮気したら國ちゃんを丸ごと石にして、二度ともとに戻らないようにしてしまうからね」

「はいっ、しませんっ」

細い指先を口に含ませてもらうと、かすかに苦くて、豊かに甘い血の味が口中に広がる。おいしい若い血ではあるのだが、物足りない。牙を立てて首筋に噛みついて、ミィちゃんを吸血鬼の仲間にした。翔と姉は知っている、吸血鬼カップルの官能を全身で知りたい。

だが、メドゥーサ三姉妹の末っ子に恋をしてしまった僕が悪いのか。これでは僕が獲物になっただけなのだが、ミィちゃんと姉さんたちは喜んでくれているのだから、これでいいのだろうか。

帰って正直に打ち明けたら、姉は怒るだろうか。翔も怒るのだろうか。翔は男だから省くとしても、あのおっかない姉に子供のころから怯えてきた僕は、恋人とその姉たちまでが、おっかない女性たち。はっきり言って化け物。

怖くて綺麗な女性に囲まれるのが、僕の運命だったのだろうか。それでもそれでも、僕には恋人ができて、望みの半分はかなえたのだから、幸せだと思わなくてはいけない。

「國ちゃん、好きよ」

「うん、僕も」

姉や翔に打ち明けたらどうなるのか、なんてことはあとから考えよう。今はミィちゃんと普通の恋人同士のキスをして、いい気持ち。キスは血の味はしなかったけど、指からだったら吸わせてもらえる。僕もメドゥーサ三姉妹のエネルギー補給のお役に立てる。

よかったね、國ちゃん、と自分に言い聞かせてみたら、その言葉は血の味ではなく、ため息の味がした。

END



## Fearful lady

<http://p.booklog.jp/book/32080>

著者 : quianred

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/quianred/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32080>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32080>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.